

前田雑記 (1)

70回を迎えた8・15

2018年8月8日 前田裕晤

70回目の8月15日を迎える。

当時、私達は13歳、九度山校の生徒だった。雑音だらけで、何が語られたのか不明だったが、「戦争は終わった・負けた」と大人の一言は分かった。

私達4人は、丹生川をせき止めたプールに泳ぎに行った。

堰の下には二艘の船が止まり、そこには、丹生川と紀の川の合流点で、高野の奥から運ばれてきた松根から松根油を搾り取るために、朝鮮から連行されて来た労務者が、ボロボロの掘立小屋にいて働かされていた。

彼らは、憲兵と警官に鞭で竹のへらで殴られ、こずかされていたのが、その労務者は船の上に立ち”マンセイ・マンセイ、生きているぞ”生きているぞ、マンセイ”と・繰り返し・繰り返し、ドブロクを片手で飲み、又、”生きているぞ・マンセイ、マンセイ”と叫んでいた。

彼らには、前日までのよれよれで、痛めつけられていた姿はなく、「生きている・生きているぞ」と、毅然とした態度がみられ、同時に、九度山駅からこの光景を覗き見していた憲兵と警官に「お前らは許さない」と、指でさし示した。

憲兵と警官30人位は、隣の学文路村から高野に向かって、逃げて行った。

私達、子供も、この光景は忘れることは出来ない。むしろ、感激して拍手を送った。

毅然として、「生きる」を、こんな困難の中でも、叫ぶ姿に、主義・主張の問題ではなく子供なりに、共感したと、言えるのかもしれない。

連行されてきた人たちは、彼らのぼろ小屋に、見かねて「芋・大根・野菜等」を夜になって差入れしてくれた、地尊院の農家の人たちに「生きる事が、出来ました」と、礼を言って回ったと言う。

”マンセイ・マンセイ、生きているぞ。マンセイ・生きているぞ、マンセイ”この叫び声は、8月15日・

敗戦と同時に、権力機構が、全く機能しなくても、九度山町は、機能していた。

九度山町には、真田幸村に従って、信州から移り住んだ人達もいる。海野・海堀・寛、等々がそうであり、「真田紐」が、彼らの販売品で、全国に販売し、珍重されたが、世情把握が、もう一つの任務として、全国情勢を掌握しようとしていたし、真田幸村はそれを真田庵を拠点として、可能だったのである。

真田幸村の旧跡「真田庵」は、今も町の中心部にあり、真田の横穴や、旧跡は多く、町の人達と馴染んでいる。

九度山町は、他の村落と異なり、独特の”風格”がある。筋の通らない見解は、通用しない。

先にも述べた、憲兵と警官が高野に逃げた後、憲兵は最後まで残らず、警官は20日すぎになって戻ってきたが、町の人達は相手にしなかったと言う。

私達・子供、13歳が遭遇した「マンセイ・マンセイ、生きているぞ。マンセイ・生きているぞ。」と、叫ぶ朝鮮から連行されてきた、ヨレヨレの労務者が、8月15日からは自己主張を、毅然とした態度で表明・いや、叫んだのである。

1945年以来、70年の歳月が過ぎた。私達には、忘れて良い事と、忘れられない事がある。

その現象を、現場で立ち会った一人として、語り伝えたい。